

患者さんの質問に どう答えますか？

言葉の意味を読み解きハートに響く返答集

髪の毛の匂いを嗅ぎあって 「くさいなあ」 ってふざけあって
くだらないの中に愛が 人は笑うように生きる

「くだらないの中に」 星野 源

星野 源のファースト・シングル「くだらないの中に」の冒頭部分である。

親密な関係にある二人の会話のほんの一部を記すだけで、この二人が互いに想いを寄せ、ともに過ごす幸せを感じていることが伝わってくる。天才である。

なぜ、医学雑誌の特集の冒頭にこんな一節を引用したのか？

それは今回の特集は、「患者さんの質問にどう答えますか？」と銘打っているのだが、これは返答の中身だけを問うているのではない、ということを改めて強調したいからである。

冒頭の座談会で尾藤誠司さんが指摘しているように、臨床は「葛藤」が渦巻く現場である。そのなかで、私たちはいかに正しく、そしてわかりやすく伝えるか、ということに腐心している。しかしこの葛藤の強い現場で私たちがしているのは、相手と自分の感情に情報を混和し、昇華することにほかならない。また、同じ座談会のなかで、言語学者の川添 愛さんは、一個人の気持ちを汲み取ったうえでのコミュニケーションは、これから人間が担当する部分だろう、とも述べている。であれば、AI（人工知能）によって情報が無限に生成される時代が到来したとしても、感情端末としての医師の役割は減ずることはない。逆に言うと、このような役割を十分に果たせない医師は、その役割をAIに譲る日が来るのだろう。

本特集では、内科外来でよく遭遇すると思われる質問について、どのように答えるか、臨床で日々活動している熟練した先生方に無理を言ってお願いした。とりあえずの返答例（これは生成AIが答えるものを想定している）と、その質問を発した患者の

背景にある思いや意図までを考慮した、一步踏み込んだ回答というように、二段構えで作成していただいた。このような構成なので、それらの医師のもつ専門や日々の臨床スタイルを大きく反映するものになるのは織り込み済みである。ただ、そのばらつき、ゆらぎこそ、この特集の醍醐味である、と考えている。臨床では、必ずしも正しい答えだけが必要なのではない。葛藤のなかで、関係を作る言葉もまた、求められているのだ。

AIの限界として、認知科学者のスティーブン・ハルナッドが提唱した記号接地問題があると言われている。AIは言語を生成できるが、それは単に記号を記号として提示しているだけであり、現実の事象と決して連結してはいない、という問題なのだろう。例えば人間は「りんご」と言えば、実際のリンゴを想像することができるが、AI自体は「りんご」を食べることも見ることも決していない、ということである。しかし、私たちが訪ねたこともない南極を想像できたり、実際には存在しないディズニー映画の世界を浦安に作り出したりしたことと同様、記号接地問題は私たち次第で、近似させていくことも可能だろう。であれば、AIがさらに進化し、大量に安定した情報が生成されるようになれば、記号接地問題とは関係なく、情報提供という役割はその座を譲っていくことになるだろう。

機械とは異なり、感情をもつ人は、言葉によって傷つき、悲しみに暮れることがある。その一方、言葉によって希望をもったり、安心が得られたりする。

したがってその答え方とともに、どう伝え合うか、がより大切になるのだろう。もちろんこれらも、機械と人間の差異は、いずれ少なくなっていくのかもしれない。しかし、現時点においては、「笑うように生きる」ことのできる、人間に大きなアドバンテージがある。

本特集に寄せられた、それぞれの返答のなかにぎっしりと詰まっている医師たちの想いをくみ取ったうえで、日々の診療に活かしていただければ、特集企画者として、望外の喜びである。



松村真司

(松村医院)